

非漢字圏学習者のための 『エリンが挑戦！にほんごできます。』を使った漢字授業の実践

中山康昭・牧原紀子・岩下智彦（ラボ日本語教育研修所）

非漢字圏の学習者の漢字学習を見ていると、漢字熟語は、それぞれ1つ1つ全く異なるものとして認知するという負荷がかかった状態で学習している現状がある。さらに、漢字が内包する意味やイメージと、その漢字そのものが結びついていない。表意文字としての利点を生かしておらず、効率的な学習ができていない状態にあるように見受けられる。

そこで、映像教材『エリンが挑戦！にほんごできます。』を用いて、映像による意味情報の入力を促し、漢字学習と結びつける授業を試みた。

授業は、2008年4月から6月までの週1回、計8回（1回45分）で、「漢字クラス」という授業で行った。実施クラスはバングラデシュ人4名（日本語学習時間200～400時間）の初級クラス学習者である。授業の手順は以下のようになる。

- ①テーマについて推測する
- ②VTRを視聴する
- ③漢字にルビをふる
- ④音読をする
- ⑤漢字をなぞる
- ⑥1週間後にテストを実施する

大北（2007）は、漢字の視覚処理において、非漢字圏学習者と漢字圏学習者とでは、違いを計測し、脳磁図の測定によると、漢字圏の学習者と違い、非漢字圏の学習者は、絵フォント、偽漢字、誤漢字、真漢字のすべての刺激に差はなかったとしている。また、二重アクセスモデル（門田2007）によると、学習者は漢字を知覚した際、音韻表層を経て意味表層に至るルートAと、意味表層に直接アクセスするルートBとの2経路があり、同時進行的に活用している。

活動ごとに、認知や意味の認識といった目的を絞ることで負荷を軽減し、意味表層へ効率的にアクセスできるのではないかと考えた。また、映像を視聴することで、文字や音とその意味表層を結び付けるだけでなく、学習者と教師間で文字から想起した意味やイメージに差異があることに気づくという利点もあった。

こうした点から、漢字習得に映像教材は有益に働くのではないかと考えられる。しかしながら、今後は、どのような刺激、指導が有効なのか、注意深く観察し、分析し続ける必要があるのではないかと。

参考文献

- 大北葉子（2007）「脳磁図による漢字認知の研究」2007年度日本語教育学会秋季大会【予稿集】
243-244
- 門田修平（2007）「シャドーイングと音読の科学」 コスモピア株式会社